

鷹取山自然観察会会報

2020.3.8 NO.27

鷹取山蝶類について —2019年調査—

2019年4月から11月までの8か月間に行った蝶類調査の結果を報告します。2014年6月に会員により月1度の蝶類調査を始めてから6年目になります。蝶は種ごとに違った食草をもち、気候など環境の違いによってもすみ分けをしています。このため、地域の環境を評価するために蝶はよい指標となっています。

これまでの調査結果については、2014年の結果は会報7号に、2015年の結果は会報11号に、2016年の結果は会報15号に、2017年の結果は会報19号に、2018年の結果は会報23号に掲載されています。

三浦半島は三方を海に囲まれ黒潮の影響を受けるため、暖地性の蝶が多く分布しています。横須賀市自然・人文博物館の報告書(横須賀市博物館研究報告(自然科学)第60号)によれば、三浦半島では84種の蝶が記録されています。このうち、普通にみられる健在種は34種、近年減少または絶滅に追いやられている減少種は27種、温暖化などで増加傾向にある増加種は7種、単発的に記録される偶産種は8種、外来種は8種となっています。

2019年の蝶類調査は、引き続き環境省「モニタリングサイト1000里地調査」に登録して行いました。調査結果は国の方にも報告し、全国状況の把握に資することになります。

1. 調査方法

調査は環境省自然環境局及び日本自然保護協会における「モニタリングサイト1000里地調査マニュアル」に沿って、4月から毎月2回行いました。調査ルートは植物相調査のコースで行い、植生の違う6区間に分け調査しました(会報12号植物相調査ルート(図1と表1)を参照)。調査頻度は月2度、原則として第1及び第3金曜日に行い、調査ルートを歩きながら、目視で判別できる種は記録し、シジミチョウ科、シロチョウ科、タテハチョウ科など同定が難しい種については捕虫網で捕獲し、図鑑により確認し、記録しました。

2. 調査結果

今回は、15回のチョウ類調査を行いました。調査日によっては気象条件などにより出現する数に違いがありました。2019年は37種が記録できました。

調査区間の結果から見てみると、A区間は鷹取山公園内で草地の他、クヌギ、コナラの落葉樹とシイなど照葉樹もある区間です。草地にはキタキチョウ、ヤマトシジミ、ツマグロヒョウモンなどが見られました。また、樹林内ではコムスジ、アカボシゴマダラ、モンキアゲハ、ヒメウラナミジャノメなどが観察されました。B区間は住宅地及び児童公園があり、アゲハの仲間やツマグロヒョウモンなどが見られました。C区間はシイ、カシなどの常緑樹の木々が多く、ここではヒカゲチョウの仲間やジャノメチョウの仲間が観察されました。D区間はコナラ、オオシマザクラなどの落葉樹が多い場所であり、アゲハの仲間、コムスジ、サトキマダラヒカゲ、ダイミョウセセリなどが見られました。E区間は杉林の林縁であり、ヒメウラナミジャノメなどジャノメチョウの仲間、ヒカゲチョウなどが多く見られました。F区間は畑地もある場所で、モンシロチョウ、ヤマトシジミなどが観察できました。

2019年には、ムラキツバメが初めて記録でき、また、2017年に記録されたヒメアカタテハも記録できました。一方、2019年に記録できなかった



ムラサキツバメ 2019/10/23 鷹取山 A 区間

た蝶は、オナガアゲハ、キアゲハ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、オオミドリシジミ、ミズイロオナガシジミ、ジャノメチョウ、ツマキチョウ、コチャバネセセリ、イチモンジチョウ、

ヒオドシチョウ、ゴマダラチョウ、アサギマダラの13種でした。6年間の合計では、50種が記録されたこととなります。

鷹取山の年別記録数

(調査頻度 2014~2015年：月1回 2016~2019年：月2回)

	科・亜科	種名	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
1	アゲハチョウ科	アオスジアゲハ	▼	○	◎	●	◎	◎
2		オナガアゲハ	△	△	×	△	△	×
3		カラスアゲハ	△	▼	▼	●	◎	◎
4		キアゲハ	△	×	△	△	△	×
5		クロアゲハ	▼	△	●	▼	○	○
6		ジャコウアゲハ	▼	○	○	●	◎	◎
7		ナガサキアゲハ	△	×	△	▼	▼	▼
8		ナミアゲハ	▼	▼	○	○	○	○
9		モンキアゲハ	▼	○	○	●	◎	◎
10	シジミチョウ科	アカシジミ	△	×	△	△	△	×
11		ウラギンシジミ	△	▼	○	○	◎	○
12		ウラナミアカシジミ	×	△	×	△	×	×
13		オオミドリシジミ	×	△	△	△	△	×
14		ツバメシジミ	△	○	○	○	◎	●
15		ベニシジミ	△	○	◎	◎	◎	◎
16		ミズイロオナガシジミ	△	×	×	×	×	×
17		ムラサキシジミ	×	△	▼	▼	○	▼
18		ヤマトシジミ	◎	◎	●	●	●	●
19		ルリシジミ	○	▼	○	○	●	●
20		ウラナミシジミ	×	×	◎	◎	◎	●
21	ムラサキツバメ	×	×	×	×	×	△	
22	ジャノメチョウ亜科	コジャノメ	△	◎	○	○	○	◎
23		サトキマダラヒカゲ	▼	○	◎	◎	○	●
24		ジャノメチョウ	×	△	▼	▼	△	×
25		ヒカゲチョウ	▼	▼	○	○	○	◎
26		ヒメウラナミジャノメ	○	◎	●	●	●	●
27		ヒメジャノメ	△	▼	◎	◎	▼	▼
28		クロコノマチョウ	×	×	△	△	×	△
29	シロチョウ科	キタキチョウ	○	○	◎	◎	○	●
30		スジグロシロチョウ	△	△	▼	▼	◎	▼
31		モンキチョウ	△	△	○	○	○	▼
32		モンシロチョウ	▼	▼	●	●	◎	◎
33		ツマキチョウ	×	×	△	△	×	×
34	セセリチョウ科	イチモンジセセリ	△	○	○	○	●	○
35		ダイミョウセセリ	▼	▼	○	○	○	◎
36		チャバネセセリ	×	△	○	▼	○	▼
37		キマダラセセリ	×	×	▼	▼	△	△
38		コチャバネセセリ	×	×	×	△	×	×
39	タテハチョウ亜科	アカタテハ	△	△	▼	○	▼	▼
40		アカボシゴマダラ	▼	△	○	◎	○	○
41		イチモンジチョウ	×	△	△	×	×	×
42		コムスジ	▼	▼	○	◎	○	▼
43		ツマグロヒョウモン	○	○	●	●	●	◎
44		ヒオドシチョウ	×	△	×	×	×	×
45		ルリタテハ	×	△	▼	▼	▼	△
46		ゴマダラチョウ	×	×	△	△	△	×
47		キタテハ	×	×	○	▼	○	▼
48		ヒメアカタテハ	×	×	×	△	×	△
49	テングチョウ亜科	テングチョウ	△	×	△	▼	○	▼
50	マダラチョウ亜科	アサギマダラ	△	×	×	×	△	×

凡例 ×：なし △：1~3頭 ▼：4~10頭 ○：11~30頭 ◎：31~50頭 ●：51頭以上

なお、鷹取山にはムラサキツバメの食草となるマテバシイは見られず、あってもごく僅かと考えられるため、2019年には周辺から飛来した個体が記録できたものと思われます。調査とは

別に、2018年にもムラサキツバメの確認情報がありましたので、今後の動向を見守る必要があります。また、2019年も、調査とは別に、クロコノマチョウ、ツマキチョウの確認情報があり

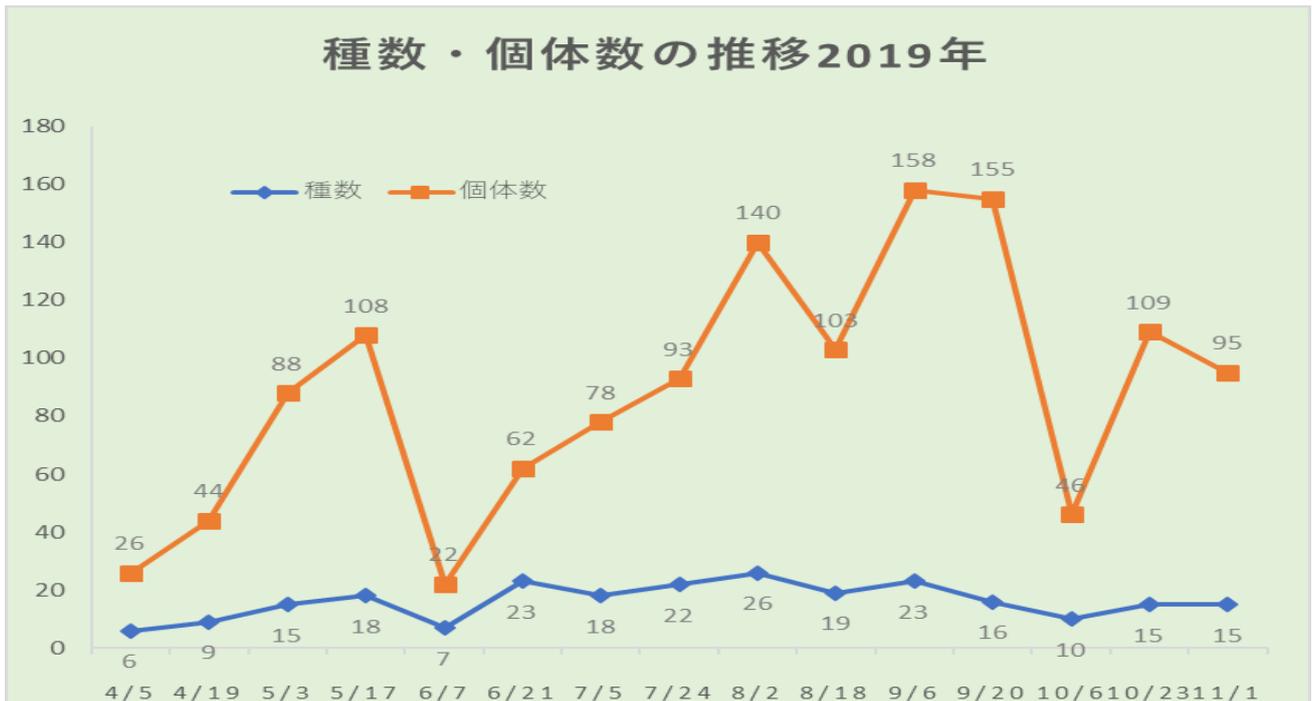
ました。2019年の鷹取山では、9月の台風15号、10月の台風19号により、倒木等の大きな環境攪乱があり、林地や草地などの連続性のあった植生の各所にギャップが生じています。蝶類調査を継続することによって、台風による蝶類への影響も把握できる可能性があります。

3. その他

蝶類調査では、絶滅していく種やこの地域で新たに見つかる種を観察することもあるかもしれません。前述の博物館報告書による減少種のうち、鷹取山自然観察会で6年間に記録されたものは、キアゲハ、ミズイロオナガシジミ、オ

オミドリシジミ、イチモンジチョウ、ジャノメチョウ、コチャバネセセリ、キマダラセセリ、ヒオドシチョウの8種になります。調査することは楽しみでもあり、調査を継続していくことによって、鷹取山周辺の蝶の生息状況がはっきりしてくると思います。

2019年調査に参加した人（鷹取山自然観察会）
本多久男、中村紀雄、金子龍次、伊沢昭司、
郡司久、原秀子、市川寛、三科清高
（順不同、敬称略）



自然観察会100回記念

鷹取山の自然観察会は平成23年4月10日に第1回を開催して以来、今年2月9日100回目を迎えた。開催当初は年間7～8回の開催であったが、平成26年から毎月実施している。

第1回の観察会は鷹取山のホームページで開催の呼びかけをしたところ、5人が参加してくれた。観察会を企画した時は参加してくれるか心配であったが、現在も会員である中村さん夫婦、高橋さん夫婦と市川さんが参加してくれた。

開催当初は、鷹取山公園を集合場所として、公園周辺を2時間ほど植物相など観察して歩いた。平成26年から参加者の要望を受け、集合場所を追浜駅、京急田浦駅、神武寺駅の3か所に月ごとに変更した。また、始めた頃は観察会の広報も十分ではなく、参加者1名ということもあった。それでもゼロということではなく



2011. 4. 10 第1回自然観察会

続けてこられた。平成26年頃からは口コミで観察会の情報も知られてきて、会を重ねるごとに参加者も増加し20名を超えることもあった。

平成25年から鷹取山自然観察会として団体登録をして、個人から団体としての活動を契機に自然観察のガイドも会員の協力を得て実施している。

自然観察会のテーマは毎年ほとんど変わらないが、山に入ると毎回新たな発見がある。

自然観察会では、多くの方に鷹取山の多様な自然を知ってもらふこと、自然と親しみ関心を持ってもらいたいと願っている。参加者の中には植物観察会と思って参加される方もあり、失望される方もあるようだが、ここでは、貴重種などの植物相は説明していない。ごく普通に見られる種を中心に観察を続けている。

これからも200回を目標に観察会を続けていくので、ご支援よろしくお祈いします。



2020. 2. 9 第100回自然観察会

また、今年度のスケジュールは、この会報の8ページに添付のとおりであり、ご参加ください。

里山保全のルールづくりについて

昨年の台風15号では、倒木などで相当の被害を受けている。倒木の処理は人の通行には支障がないほどに回復しているが、多くの倒木により植生や昆虫相に影響を与えることが予想される。

最近気にかかることは、鷹取山の至る所で木々の伐採や草地の刈込が目立っていることである。写真は親不知の下にあるシバヤナギの伐採痕である。ここのシバヤナギの雄株は大きく育ち、春にヤナギ特有の花を咲かせるが、今年は残念だが見られない。誰が何のために伐採したのだろうか。

また、アオキの伐採については会報16号で問題提起してきたが、この周辺の観察路ではアオキ、ヤツデの伐採は後を絶たない。アオキは自然環境保全地域の看板がある場所でも伐採されている。伐採したものが放置したままで見ても汚い。当会では草本の保護を目的として、場所を限って毎年アズマネザサの刈り取りを行っているが、過度の伐採に反対する方もいる。

鷹取山公園は住宅地に近接しているため、散歩などで多くの方が利用している。そのことは大いに結構なのだが、園芸種の持ち込みや、公園内に花壇を作ったりする方もいる。植物相調査でも園芸種が目立って多くなっている。

そもそも、鷹取山公園は都市公園のうち風致公園に指定されている。風致公園とは、風致（自然の風景などのおもむき、味わい）を享受することを目的とする都市公園であり、樹林地、湖沼海浜等の良好



倒木の処理

な自然的環境を形成する土地を選定し、配置されたものである。

更に、鷹取山公園の周辺には都市林が配置されていて自然の景観が保たれている場所である。街中の街区公園とは違い、子供の運動公園ではなく、自然



シバヤナギの伐採

と親しみ、多様な生物に配慮した維持管理が求められる場所だと考えている。

鷹取山には、コナラ、クヌギ、オオシマザクラなどの落葉広葉樹の森、スタジイ、カシ類、タブノキなどの照葉樹の森、ケイワタバコ等が生育する岩崖、展望台下の草地、観察路周辺の林縁部、林間部など多様な自然環境が見られる。また、アズマネザサ群落、アオキ群落、ススキ群落も鷹取山の自然を構成する一部である。

メタセコイアと記憶

15年ほど前、横浜の中心部で野草を調べる機会があり、阪東橋首都高入り口で不思議な樹を見つけました。針葉樹の樹形ですが、スギやモミなどとは葉の形が違い、カヤのよう羽状の葉形ですが樹形が違います。当時も樹木の知識が少ない私でしたから、あれこれ図鑑を使って調べると、どうやらメタセコイアらしいことが分かってきました。そのとき蘇ったのは65年以上前に見た雑誌の写真でした。10歳前後の私が夢中で読んでいた『少年』や『冒険王』といった少年雑誌のどれかに載っていて「生きている化石メタセコイアが日本に寄贈された」というような記事があったのです。当時、野島山などで貝の化石掘りに熱中していたので記憶に残ったのかもしれませんが、その後全く関心を持つ機会もなく、阪東橋での発見となったのです。しかし、自信が持てなかったため、横浜にある「子供植物園」に行き、間違いのないことを教えてもらいました。そこで、図鑑には載っていない一つの疑問「メタ」の意味を尋ねましたが、わからないとのことでした。その後、発見者の生物学者三木茂氏の著書を読み「メタ」の意味が分かったのですが、困ったことに失念してしまいました。

今年の1月21日、霞ヶ浦に撮影に行きました。そこで、筑波実験植物園で「高さ2m 35cm 世界一大きい花シヨクダイオオコンニャクの花が咲いた」というニュースを見ました。すぐに頭に浮かんだのは「メタ」で、意味を聞けるかもしれないの思いから、翌朝筑波山での撮影を終えてから筑波学園都市に向かい、植物園に行きました。入り口を入ると、なんと温室までの50mほどの道の両側は、セコイアとメタセコイアが交互に植えられた並木になっていました。しかも、60年

一方、クヌギ、コナラなど薪炭材として利用してきた二次林は、このまま人の手が入らなければ衰退し、下草の生えにくい照葉樹の森へ遷移し、地域の生態系は貧弱なものになってしまうだろう。

里山環境をどのように保全し、周知・啓発していくか、私たちにできることは本当に限られてしまうが、鷹取山自然観察会として最低限のルールを作る必要があるのではないだろうか。



を超えているだろう巨木です。初めて見るセコイアの樹皮は深く大きく網の目のように裂けていてメタセコイアと違うので、どうして同じ仲間なのか不思議に思いました。温室に入り、シヨクダイオオコンニャクの花を見てから、解説している教授のような方に「メタ」の意味を聞くと、「古いとか以前のとかいう意味で、化石の名前によく使われる」と教えてくれ、つかえていたものが取れて気分がすっきりしました。

メタセコイアが鷹取小学校にもあるのに気づいたのは、4,5年前でした。発見者の著書で、発見は1941年中国奥地を調査して見つけ、戦後の45年発表したとありました。その後採取された種からアメリカで苗が作られ、49年日本に苗が贈られてきました。その後も贈られてきたり、日本でも増やして日本各地に配布されたりしたようです。そんな中の1本が鷹取小にも来たのでしょうか。筑波のそれは幹が1mで高さが30mほどありましたが、鷹取小のは少し幹が細いので筑波のよりは若いのでしょうか。秋になるときれいに紅葉し、小枝ごと落葉するのも特徴で

す。ますます巨木になるメタセコイアを、子供たちが眺めつつ成長するというはとても素晴らしいことと思いました。

この稿を書くにあたり、PCで検索すると、メタセコイアの解説の中に「メタ」の意味が書いてありました。便利な時代になったもので、何年もわだかまっていたことが簡単に解決したことで拍子抜けしてしまいました。ところが発見者の著書で読んだ発見に至る過程の記憶が、解説で書かれている内容と少し違うので、私の記憶違いでしょう。古いことは覚えていても、最近のことは忘れてしまう、私の脳がもう「メタ」になり、化石化しているからでしょう。

(市川 實)

写真1 鷹取小 冬のメタセコイア

写真2 シヨクダイオオコンニャクの花 前日、
花が倒れてしまいました。

鷹取山のコケ類

鷹取山の岩肌には小さな植物のコケ類が見られる。コケ類は小さくて分類が難しいので敬遠されてしまう。当会の植物相調査でも維管束植物に限ってコケ植物は除いている。コケはシダや被子植物などと違い根や維管束を持たず、シダと同様に胞子で増える。

コケ植物は約5億年前の古生代に陸上に進出した原始的な植物であり、進化を重ねて、シダ、裸子、被子植物に進んできたといわれる。

コケは世界で約18,000種、日本ではそのうち約1700種が知られていて、シダ類よりも種数は多い。コケ植物は蘚苔類ともいい、蘚(せん)類、苔(たい)類、ツノゴケ類の3つに大別している。蘚類は茎と葉の区別がつく茎葉体である。その中で茎が直立するタイプと、茎が匍匐するタイプがある。

苔類は茎と葉がある茎葉体と、全身が葉のように平べったい葉体のものである。

鷹取山で分類が容易で普通に見られる、エビゴケ、コスギゴケ、ジャゴケを紹介する。

エビゴケは凝灰岩にヤナギの葉のように多数の葉を規則正しく2列につける。葉の形がエビの触角に



見えるためにこの名がついている。鷹取山では普通に見られる。



コスギゴケは岩肌や石の上などに見られる。細めの葉がその周りにならんでいて、スギの枝のように見える。スギゴケ科にはヒメタチゴケ、ナミガタタチゴケ、ヒメスギゴケ、シンモエスギゴケなどがある。

苔類の間では日当たりの悪い場所でゼニゴケの中間のジャゴケが多く見られる。ゼニゴケ類はよく似ていて分類が難しいが、ジャゴケは表面に多角形の鱗を並べたような網状の模様があり、判別しやすい。雌雄別株で雌株では春に胞子の柄を長く伸ばす。鷹取山ではヒメジャゴケも見られる。

鷹取山には湿り気のある岩場にはコケ類が見られるので、今後少しずつ観察していきたい。興味ある方は一緒にどうぞ。(伊沢昭司、本多久男)



この冬に出会った蛾

冬の鷹取山を歩いても、大好きな昆虫には、なかなか出会うことができません。それだけに、冬にしか見られない蛾＝冬尺蛾を見つけると、とても嬉しくなります。

冬尺蛾は、冬に成虫が繁殖活動をするシャクガ科の中間の総称です。「日本の冬尺蛾」(中島秀雄・小林秀紀 2017 年むし社)によれば、日本の冬尺蛾は、エダシャク亜科 15 種、フユシャク亜科 14 種、ナミシャク亜科 6 種の計 35 種です。この本の著者は、特異な生態の冬尺蛾を次のように定義しています。「1. 年一回の発生で、成虫は晩秋から早春に出現する。2. 冬季に生殖活動を行い産卵する。3. 雌の翅が欠けるか縮小して飛翔できない。4. 口吻は短縮して、食餌しない場合が多い。」

鷹取山で私が出会った冬尺蛾は雄ばかりです。いつかは、翅のない、あるいは天使のように小さな翅の雌に出会いたいと思っています。

この冬に鷹取山で私が出会った冬尺蛾は、①クロスジフユエダシャク 2019/12/20、②シモフリトゲエダシャク 2020/2/7、③クロテンフユシャク 2020/2/14 の3種です。自宅(湘南鷹取1丁目)では他に、⑤ナミスジフユナミシャク 2020/1/24、⑥シロフフユエダシャク 2020/2/15、⑦ウスバフユシャク 2020/1/10 が見られました。また、フユシャクモドキとも言われた④ハイイロフユハマキには、2度(2020/1/30、2020/2/14)も鷹取山で出会いました。

まだまだ冬の蛾をと思っていたところ、2月21日の鷹取山鳥類調査時に、集合場所の湘南鷹取4丁目の路上で立派な蛾を拾いました。帰宅後に調べてみたら、⑧トビモンオオエダシャクという早春に見られる蛾でした。2月14日に鷹取山で出会った⑨シロ



モンエダシャクも早春の蛾です。2020年の春は、どうやら早めに訪れているようです。

(三科清高)



鷹取山自然観察会のご案内

2020年度自然観察会の予定

鷹取山自然観察会は第二日曜日に開催しています。季節ごとの様々な生き物を観察しています。初めての方もお気軽にご参加ください。日程は表のとおりです。

日 程	観察会のテーマ	集合場所
4月12日(日)	春に咲く花を見つけよう	京急田浦駅
5月10日(日)	オトシブミを見つけよう	追浜駅
6月14日(日)	初夏に咲く花を観察しよう	神武寺駅
7月12日(日)	蝶とその食草を探してみよう	追浜駅
8月 9日(日)	セミやバッタの観察をしてみよう	京急田浦駅
9月13日(日)	鷹取山の秋の七草は何でしょう	追浜駅
10月11日(日)	コオロギなど鳴く虫を探してみよう	追浜駅
11月 8日(日)	野菊の違いを観察しよう	神武寺駅
12月13日(日)	落ち葉の種類を見分けよう	追浜駅
1月10日(日)	冬を越す樹木を観察しよう	追浜駅
2月14日(日)	冬鳥の観察と冬芽を観察してみよう	京急田浦駅
3月14日(日)	早春の野草を探してみよう	追浜駅

注) 観察会のテーマは変更する場合があります。直近の情報をご確認してください。

- ◆集合場所：集合場所駅改札出口9時20分集合30分出発
観察会は12時まで現地解散小雨は決行。大雨の場合は翌週の日曜日に延期します。(延期の場合は朝7時までにメールで連絡。)
- ◆参加費：会員100円、非会員200円(保険料・資料代)小学生100円、未就学無料
- ◆定員：20人、先着順
- ◆申込方法：住所、氏名、電話番号(保険加入のため)メールアドレスを記入して、下記のアドレスまで申し込みください。小中学生は学年をお知らせください。
- ◆持ち物：歩きやすい服装、メモ帳、鉛筆、飲み物、あれば虫眼鏡及び双眼鏡
- ◆注意事項：コースの途中には坂道、足場の悪い場所もあるため滑りにくい靴で参加下さい。
- ◆主催：鷹取山自然観察会

《問い合わせ・申込み先》

メールアドレス takatori_0721@nifty.com

